

## 少ない時間でなんでも引き受けている国語教育

第一原則が、どこの国でも行なわれているように、第二原則も、実は、外国ではあたりまえのことなのです。たとえば、「ハンカチーフ」ということばでさえ、アメリカでは、社会科用語となっていて、その書き方も社会科の時間に習って、国語の勉強の時間にはしないのです。

どんな学科でも、その学科にたいせつな用語というものがあって、それをしっかりと学ぶことが、その学科の学習を進めていくのに必要なことなのです。だから外国では、その用語は、その学科でたいせつに扱い、読み書きもその学科で習っているのです。

日本だけが、なんでもかんでも、読み書きは国語教育に任せているのです。ところが、それでは、ことばや文字というものは、その使われる場によって、意味や内容にちがいがあるのですから、国語の時間に、理科や社会科の内容にまで深入りしなくてはならなくなってしまいます。

しかし、それも、国語の時間が外国なみに多くあるなら、よいでしょう。ところが、欧米、およびソ連の半分以下の時間しかないのです。

つまり、日本の国語教育は、外国の半分以下の時間で、外国以上の仕事を引き受けているわけです。三年生を例にいいますと、

	授業総時間数	国語時間数
日本	22 時間	6 時間
東ドイツ	24 時間	14 時間
フランス	30 時間	13 時間 45 分

であり、アメリカは州によってちがいがありますが、だいたい東ドイツに近く、ソ連も同じです。

こうしてみると、日本だけが、教育方法から内容までまったくちがっていることがわかります。